

中学校・高等学校の英語授業における辞書使用の実態調査

—愛媛県の英語教員を対象にしたアンケート調査から—

寺嶋 健史 (松山大学)

Abstract A questionnaire survey on dictionary use in English classes was conducted. A total of 448 Japanese teachers of English in Ehime were asked if they got the students to use dictionaries in English classes. The results were analyzed according to their personal backgrounds such as their school (junior or senior high school), age, years of experience as an English teacher, etc. Based on the main findings, dictionary use in English education in future is discussed.

1. はじめに

英語学習に辞書は必需品である。学校教育での英語学習のみならず、卒業後の自学自習にも辞書は欠かせない存在である。しかし、最近では辞書をほとんど使ったことがないという英語関連領域専攻の学生も少なくない。ベネッセ教育研究所が2001年に全国の中学生・高校生に実施した学習基本調査によると、「学習方法」の「辞書を引く」は1990年の第1回調査と比べると、中学生で53.0%から33.6%へ約20%、高校生で75.8%から62.6%へ約13%それぞれ減少し、他の事項に比べて際立っている。また、ベネッセ(2003)の「新入生の学力変化の実態とその対策」によると、「不明な語句は教科書ガイドで確認」する生徒が増加する一方で、「辞書で文意に適当なものに見当をつけ、例文を確認」する生徒が減少している。近年の教科書には、欄外に語句の意味が書かれていたり、巻末に単語の意味が一覧になっていたりすることが、「辞書活用の低下」につながっていると分析している。このように、最近では英語学習で辞書が活用されることが少なくなる傾向がある。

日本人英語学習者を対象にした辞書使用に関する主な調査・研究として、勝呂(1988)、萩野(1995)、畠山(1996)、浅羽(1997)、山岸(1998)、畠山(2001)、藤村(2001)などがあげられる。浅羽(1997)と畠山(2001)は大学生を対象に中学・高校時代に辞書指導を受けた経験を、藤村(2001)と畠山(1996)は大学生の普段の辞書使用状況を、勝呂(1988)は高専の学生に中学校での辞書使用頻度を、山岸(1998)と萩野(1995)は大学生を対象に普段の辞書使用と中学・高校での辞書指導を受けた経験の両方について、それぞれアンケート調査している。いずれの調査でも、辞書を使う頻度は低く、辞書指導を受けた経験も少ない結果が出ている。

このように学習者を対象にした辞書使用に関する調査は比較的多い一方で、英語教員を対

象にした辞書使用・指導に関する調査は少ない。采女(1983)と清川(1988)は、1985年に岡山県高校教育研究会英語部会が県内の高校1年生と英語教員を対象に実施した、辞書に関する調査結果を取りあげている。まず、英語教員を対象にした「英語指導の調査」では、高校入学時に指導上困難と思われる点の1つとして、「辞書が引けない」と答えた教員が30%、今後の指導重点目標として「辞書を引く習慣」をあげた教員が39%であった。一方、高校1年生を対象にした「英語学習の調査」によると、中学校で辞書の引き方を習ったと答えたのは49%、辞書で単語・熟語の意味をきちんと調べることが出来ると答えたのは41%であった。この2つの調査から、教員は生徒が辞書を使いこなせないと感じている一方で、生徒は使いこなせると思っているという教員側と生徒側の意識のずれが明らかになった。

山岸(1998)では、ELEC同友会実践研究部会が1996年に様々な研究会に参加した英語教員を対象に実施した、辞書指導に関するアンケート調査の結果を紹介している。辞書指導を行うと答えた中学校教員は64%、高校教員は60%で、3年間に2～3時間程度適宜実施するケースが最も多かった。但し、この調査の回答者数が24名程度と少なく、研究会に参加する積極的な教員の意見ということもあり、この結果を一般的な傾向とみなすことは難しい。

英語教員を対象にした辞書指導に関する大規模な調査事例に、井上・多良(2004)がある。高知県の中学校・高等学校の英語教員229名を対象に英和辞書に関して、教員自身にとっての辞書、辞書指導観、辞書指導状況、その他(英語学習全般)について調査している。大半の教員は辞書指導の必要性を感じていながら、体系的な一斉辞書指導を殆ど実施しておらず、その最大の理由は時間の不足のためとしている。しかし、辞書指導を実施すれば自学自習の習慣づけが期待できると結論づけている。

井上・多良(2004)のような、英語教員を対象にした辞書使用の実態および意識に関する大規模な調査はほとんど行われていないこともあり、今回は愛媛県の英語教員を対象にした同様のアンケート調査を実施した。但し本調査では、英和辞書に限定せず、また教員自身の辞書指導を受けた経験、電子辞書に対する考え方など、さらに新たな質問項目を追加した。

2. 調査概要

2.1 調査目的

英語授業での辞書使用の実態を把握する。辞書が扱われている場合にはその具体的実施状況を、扱われていない場合にはその理由をそれぞれ明らかにし、今後の英語教育における辞書指導のあり方について考察する。

2.2 調査対象者

愛媛県内の中学校、高等学校および特殊学校に勤務する英語教員。

2.3 調査時期

2005年6月。

2.4 質問紙

本研究のアンケートは、1) 辞書に関する全般的なこと、2) 現在の授業における辞書の扱い、3) 自身の学生時代を振り返って、4) 電子辞書について、の概ね4つの内容の質問事項で構成されている。本論では2)の分析とその結果について取りあげる。授業での辞書を使わせるかどうかを尋ねた後、使わせる教員に対する設問と使わせない教員に対する設問が続く。前者に対しては、Q1) 授業での辞書使用暦、Q2) 授業で辞書を扱うようになったきっかけ、Q3) 実施概要(実施学年、科目、使用辞書の種類、頻度など)、Q4) 具体的実施内容、Q5) 実施の効果、について尋ね、後者に対しては、Q1) 辞書を扱わない事情と、Q2) その具体的な理由、について尋ねた。設問の回答の大半は選択式で複数回答とした。これらの他にも質問事項は用意されていたが(資料参照)、紙面の制限の関係で特に本論で必要と思われる項目だけを選んで紹介する。本論ではそれらに便宜上の通し番号Q1)~Q5)を振ることにした。

2.5 調査の手続き

愛媛県内の中学校、高等学校、特殊学校に勤務する全英語教員に協力を求めるため、愛媛県教育研究推進委員会にて調査の趣旨を説明し、調査協力の了解を得た後、各校に配属されている英語教員数を調べ、各校の教科主任宛に人数分の調査紙を郵送した。約1ヶ月の回答期間を設け、同封した返信用封筒で返送してもらった。

2.6 分析

各調査項目の単純集計(各選択肢の回答度数と有効回答数に対する割合)に加え、質問紙最初のページで尋ねた回答者の各属性の観点別分析を、カイ二乗検定を用いて行った。

2.7 調査紙回収率

県内の英語教員958名に調査紙を配布し、484名から回答があった(回収率50.5%)。これらを学校数で見ると、配布した学校は239校で、149校より回答があった(回収率62.3%)。

3. 結果

3.1 回答者の属性

表0は回答者484名の属性別集計結果である。これらの属性のうち、a) 勤務校種、b) 公立・私立、c) 年齢層、d) 英語教員歴、e) 出身大学の専攻、の5つを分析観点に据えた。なおa)に関して、中高一貫校と特殊学校からの返却率が低く、十分な有効回答数が得られなかったため、今回の分析ではこれらを除外し、中学校と高等学校のみを対象とした。

表0 本調査の回答者の属性一覧

勤務校種			学校別			年齢層			英語教員歴		
中学校	230	47.5%	公立中学校	94	63.1%	20代	99	20.5%	5年未満	90	18.6%
高校	230	47.5%	県立高校	41	27.5%	30代	182	37.6%	5年～	71	14.7%
特殊学校	16	3.3%	中等教育学校	2	1.3%	40代	132	27.3%	10年～	180	37.2%
その他	8	1.7%	私立学校	5	3.4%	50代～	67	13.8%	20年～	78	16.1%
			特殊学校	8	5.4%	不明	4	0.8%	30年～	51	10.5%
									不明	14	2.9%
職名			出身大学での専攻			性別					
教諭	423	87.4%	英語系	363	75.0%	男	190	39.3%	公立	456	94.0%
常勤講師	31	6.4%	非英語系	87	18.0%	女	259	53.5%	私立	28	6.0%
非常勤講師	22	4.5%	不明	34	7.0%	不明	35	7.2%			
その他・不明	8	1.7%									

英語系: 英語教育、英米文学、英語学、英米語、等の合計。

非英語系: 経済、法文、他教科教員養成課程、国際文化、等の合計。

また、中高一貫校に勤務する教員のうち、中学校（中等部）に属している場合は中学校に、高校（高等部）所属の場合は高校に、それぞれ含めて集計した。さらに、授業で生徒に辞書を使わせる教員に対する質問事項の分析に限り、「f) 辞書を使わせる授業の実施暦別」の観点を追加した。3つの観点 c), d), f) を個別に分析する必要は無いようにも思われるが、年齢と職歴、職歴と辞書使用暦がそれぞれ一致するとは限らないため、分析を試みることにした。なお、観点別分析に関しては、カイ二乗検定で有意差が認められた分析結果のみについて集計結果表を提示し、その解釈を試みることにする。

3.2 授業での辞書使用の有無に関する回答の分析結果

有効回答総数 474 名のうち 54.6%，さらに「両方」を含めると 56.9% が授業で生徒に辞書を使わせている。なお「両方」とは、学年、科目、コースによって、辞書を使う場合と使わない場合があるという類の回答をまとめた項目である。

表1 辞書使用状況

	度数	%	有効%
使わせる	259	53.5	54.6
使わせていない	204	42.1	43.0
両方	11	2.3	2.3
有効合計	474	97.9	100.0
無回答/不明	10	2.1	
合計	484	100.0	

次に、3.1 節で示した各観点別に分析を試みた結果、表2 のようになった。勤務校種別、年齢層別、英語教員歴別、の3つの属性において有意差が見られた ($\chi^2=135.39$, $\chi^2=16.51$, $\chi^2=21.47$, いずれも $p<.01$)。辞書を使わせる授業の実施率は、中学よりも高校で、英語教員歴 30 年以上、そして 50 代以上の熟練教員による場合に、それぞれ顕著に高くなっている。また、統計的に有意では無いが、公立学校よりも私立学校での実施率と、大学時代に英語関係の分野を専攻しなかった教員よりも、専攻した教員による実施率が僅かに高い。次節以降では、授業で生徒に辞書を使わせている教員の回答と、使わせていない教員の回答とに分けて、それぞれの結果を詳しく検証していく。なお、表2によると私立学校教員の有効総数が少なく、公立学校との比較には無理があるため、次節以降からは観点 b) による分析は行わないことにした。

表2 辞書を使わせる授業の実施状況(%)：回答者属性別

a) 勤務校種別

辞書を	全体 (N=446)	中学校 (N=225)	高校 (N=221)	χ^2 検定 df=1
使わせる	55.2	28.0	82.8	**
使わせない	44.8	72.0	17.2	

b) 公立・私立別

辞書を	全体 (N=462)	公立 (N=435)	私立 (N=27)	χ^2 検定 df=1
使わせる	56.1	55.4	66.7	n.s.
使わせない	43.9	44.6	33.3	

c) 年齢層別

辞書を	全体 (N=459)	20代 (N=97)	30代 (N=173)	40代 (N=127)	50代～ (N=62)	χ^2 検定 df=3
使わせる	56.0	48.5	54.9	52.0	79.0	**
使わせない	44.0	51.5	45.1	48.0	21.0	

d) 英語教員歴別

辞書を	全体 (N=451)	～4年 (N=89)	5年～ (N=69)	10年～ (N=171)	20年～ (N=75)	30年～ (N=47)	χ^2 検定 df=4
使わせる	56.5	50.6	50.7	52.6	58.7	87.2	**
使わせない	43.5	49.4	49.3	47.4	41.3	12.8	

e) 出身大学での専攻別

辞書を	全体 (N=431)	英語系 (N=348)	非英語系 (N=83)	χ^2 検定 df=1
使わせる	55.5	56.9	49.4	n.s.
使わせない	44.5	43.1	50.6	

** p<.01

3.3 「授業で辞書を扱う」教員の回答分析と結果

この分析では、前節の表1の「使う」と「両方」の合計270名を対象とした。各質問項目の集計の際は、270名から無回答数を除外した残りを有効回答総数とした。そして2.4節で言及したQ1)～Q5)の各設問の単純集計結果と各種観点別分析の集計結果を表で示し、それぞれについて考察を試みる。なお、前述のように観点別分析に関しては、a)～f)の全てではなく、統計的有意差が認められた観点の結果のみを詳しく取りあげることとする。

3.3.1 「Q1) 生徒に辞書を使わせる授業を始めて今年度で何年目ですか。」

まずは、3.2節で触れた3つの観点(c)年齢層、d)英語教員歴、f)授業での辞書使用暦)の関係を調べるために、f)を軸にして、c)とd)とでクロス集計した結果を表3に示す。

表3

		年齢層別				英語教員歴別					合計
		20代 N=43	30代 N=88	40代 N=54	50代～ N=48	～4年 N=41	5年～ N=33	10年～ N=79	20年～ N=40	30年～ N=40	
辞授 書業 使で 用の 暦	30年～	0.0%	0.0%	1.9%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	82.5%	N=33
	20年～	0.0%	0.0%	42.6%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	72.5%	7.5%	N=32
	10年～	0.0%	51.1%	31.5%	6.3%	2.4%	0.0%	72.2%	12.5%	5.0%	N=66
	5年～	18.6%	25.0%	7.1%	4.2%	2.4%	81.8%	8.9%	0.0%	2.5%	N=36
	～4年	81.4%	23.9%	16.7%	6.3%	95.1%	18.2%	19.0%	15.0%	2.5%	N=68

f)とc)との相関は $r=0.83$ で、f)とd)との相関は $r=0.74$ であった。このことから、生徒に辞書を使わせる授業の実施暦は、同時に自身の英語教員歴でもあり、彼らの多くは英語教員になって以来、辞書を使わせる授業パターンを踏襲し続けしており、途中で辞書使用をやめたり、途中から使わせ始めたりするケースは少ないという傾向をうかがい知ることが出来る。

3.3.2 「Q2) 授業で生徒に辞書を使わせるようになったきっかけは何ですか。」

生徒に辞書を使わせる授業を始めたきっかけについて尋ねたところ、表4のような結果になった。

表4 授業で生徒に辞書を使わせ始めたきっかけ集計結果(複数回答)

	N=266	有効%	i. その他の少数意見
a. 生徒が基本的な使い方を習得していないため	116	43.6	↑ 教師や友達に尋ねて自分で調べようとしない。 ・ALTからの要請。・おもしろいから ・初任者研修で。 ・生徒が自主的に持ってくる。 ↑ 卒業生に話を聞いて、必要性を痛感した。 ・きっかけと言うほどのものではない。 ・同じ辞書(小学卒業記念)を全員が持っているから。 ↑ 現在は学習指導要領にも記述があるので。 ・せっかく買ったのに使わないのはもったいない。 ・発音は記号で覚えることが日本人英語話者には必要。 ↑ 辞書を利用して分かりやすい授業を工夫する。 ・何かの研究会の時、高校の先生方のご意見で 「中学生の時に辞書で調べる習慣をつけさせてほしい」と言われた。
b. 当然のこととして	154	57.9	
c. 他の英語教師が実施しているため	8	3.0	
d. 自身が学生時代に辞書指導を受けたため	43	16.2	
e. 自身が学生時代に辞書指導を受けなかったため	8	3.0	
f. 大学での教科教育法や教育実習で必要性を学んだ	11	4.1	
g. 生徒や保護者から要望があったため	0	0.0	
h. 勤務校の方針で	12	4.5	
i. その他の少数意見	40	15.0	

授業で辞書を使わせる教員の約6割(57.9%)は、「辞書使用は当然のこと」と回答し、最大の理由となっている。そして「基本的な使い方を習得していない生徒を放っておけず使わせ始めた」教員が43.6%で2番目に多い。いずれの事由についても「使えて当然であるべき辞書を使えなくては困る」という教員の思いが根本にあると考えられる。

表4の「d.」と「e.」の回答から、「かつて自身が辞書指導を受けなかったために教員となった今こそ生徒にはきちんと辞書指導をしておきたい」という理由よりも、「受けたからこそ現在生徒に対してもきちんと指導をしなければならない」という理由のほうが先行しているようである。その他の少数意見の中には、「ALT, 卒業生, 高校教員などの外部からの要請」「生徒が全員辞書を持っている環境にある」「初任者研修で指導があった」など興味深い事由が含まれている。

各種観点別分析結果のうち、カイ二乗検定で有意差が認められたのは、a) 勤務校種別, c) 年齢層別, d) 英語教員歴別, の3つであった。まず、勤務校種別分析結果を表4-1に示す。

全般的にどの選択肢も高校の割合が高くなっており、授業での辞書使用に対する意識は高校教員のほうが強いと言えそうである。しかし、両校種間で有意差が認められたのは、「b. 当然のこととして」($\chi^2=9.72, p<.001$)と「f. 大学で必要性を学んだ」($\chi^2=3.98, p<.05$)の2項目だけであった。

表4-1 辞書使用のきっかけ(a. 勤務校種別)

	全体 N=253	中学校 N=65	高等学校 N=188	χ^2 検定 df=1
a. 生徒が基本的な使い方を習得していないため	43.9%	36.9%	46.3%	n.s
b. 当然のこととして	56.5%	40.0%	62.2%	***
c. 他の英語教師が実施しているため	3.2%	3.1%	3.2%	n.s
d. 自身が学生時代に辞書指導を受けたため	15.8%	9.2%	18.1%	n.s
e. 自身が学生時代に辞書指導を受けなかったため	2.4%	3.1%	2.1%	n.s
f. 大学での教科教育法や教育実習で必要性を学んだ	4.3%	0.0%	5.9%	*
g. 生徒や保護者から要望があったため	0.0%	0.0%	0.0%	
h. 勤務校の方針で	4.7%	1.5%	5.9%	n.s

* * p<.001,

* p<.01

* p<.05

表4-2 辞書使用のきっかけ(c. 年齢層別)

	全体 N=263	20代 N=47	30代 N=97	40代 N=66	50代～ N=53	χ^2 検定 df=3
a. 生徒が基本的な使い方を習得していないため	43.7%	48.9%	43.3%	42.4%	41.5%	n.s.
b. 当然のこととして	58.6%	53.2%	59.8%	54.5%	62.3%	n.s.
c. 他の英語教師が実施しているため	3.0%	10.6%	2.1%	1.5%	0.0%	**
d. 自身が学生時代に辞書指導を受けたため	16.3%	19.1%	14.4%	13.6%	20.8%	n.s.
e. 自身が学生時代に辞書指導を受けなかったため	3.0%	2.1%	5.2%	1.5%	1.9%	n.s.
f. 大学での教科教育法や教育実習で必要性を学んだ	4.2%	10.6%	4.1%	3.0%	0.0%	n.s.
g. 生徒や保護者から要望があったため	20.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
h. 勤務校の方針で	4.6%	14.9%	5.2%	0.0%	0.0%	**

* χ^2 検定欄の灰色部は、検定に必要な有効数に度数が満たなかった。

次に年齢層別分析結果(表4-2)をみると、「c. 他の教員が実施していたから」($\chi^2=11.70$, $p<.01$)と「h. 勤務校の方針で」($\chi^2=17.18$, $p<.01$)で有意差が認められたが、ともに母数が少ないためこの結果は信頼性に問題がある。しかし、いずれもの項目も20代の教員のパーセンテージが高く、教員になってしばらくは周囲の環境に合わせようとする姿勢が現れている。また、「a. 生徒が辞書を使えない」と「f. 大学時に重要性を学んだ」の2つも含めて、これら4項目について詳しくみると、年齢層が高くなるほど、割合が少しずつ下がる傾向にある。つまり、若い世代ほど、「周囲に影響を受け、大学時代の体験を反映させ、辞書を使えない生徒を放っておかず指導を始める」といういかにも若手らしい行動がうかがえる。逆に、年齢を重ねるごとに、これらの意識が弱くなっていくとも言えそうである。

英語教員歴別分析では、「c.」と「h.」に加え、「f.」でも有意差が認められたが(各々 $\chi^2=12.96$, $\chi^2=14.18$, $\chi^2=10.04$, いずれも $p<.05$)、年齢層別分析の場合と同様に、母数不足のため信頼性に問題が残る。また、教員歴が長くなるほど実施率が下がる「c.」と「h.」を除いて、教員歴の長さとともに実施率が増減する項目は無かった。その他の観点別分析では、どの項目においても有意差は認められなかった。

3.3.3 「Q3) 辞書を使わせている学年、科目名、辞書の種類、頻度を教えて下さい。」

異なる学年、科目、クラスで実施している場合が考えられるため、複数回答で尋ねることにした。中学と高校とに分けて集計結果を表5に示す。

表5 辞書を使った授業の実施概要 校種別集計結果(複数回答)

中学校			使用辞書			実施科目		
実施学年	N=63	%	使用辞書	N=63	%	実施科目	N=55	%
1年生	27	42.9	英和	51	81.0	全般	7	12.7
2年生	39	61.9	和英	46	73.0	リーディング	10	18.2
3年生	43	68.3	英英	1	1.6	英作文	27	49.1
						英会話	3	5.5
						総合学習	4	7.3
						その他	11	20.0

高等学校			使用辞書			実施科目		
実施学年	N=185	%	使用辞書	N=183	%	実施科目	N=181	%
1年生	94	50.8	英和	182	99.5	英語I, II	139	76.8
2年生	92	49.7	和英	14	7.7	リーディング	63	34.8
3年生	77	41.6	英英	2	1.1	ライティング	70	38.7
						オーラル	38	21.0
						総合学習	5	2.8
						その他	2	1.1

*その他：文法，英検対策，補習，等。

まず実施学年に着目すると、中学では学年が上がると実施率は上昇するのに対し、高校では下降する。高校生は受験が近づくと、教師が授業で特に指示をしなくても生徒自ら辞書を使うようになるためと考えられる。使用辞書は両校とも英和辞書が最も多いが、中学では和英辞書も同じ程度の使われ方をしている。実施している授業は、科目名で選択肢を用意したが、「リーディング」と「英作文・ライティング」に○を付けた中学校教員がかなりいた。これらは本来、中学校の科目名としては存在しないはずであるが、選択の授業で実施しているか、あるいは科目名としてではなく、具体的な使用場面や技能を想定して回答したためと考えられる。そこで、中学の集計表にはリーディングと英作文の区分を新設した。高校では英語I,IIで最も辞書が使われている結果が出たが、実質的にはリーディングの補助教材として使われていると考えられる。つまり、中学ではライティングで、高校ではリーディングで特に辞書が活用されていることになる。使用辞書の結果がそのまま反映されたかたちとなっている。実施頻度に関しては、様々な回答例に対応できるように表6のような形式で尋ねたため、返って回答パターンがばらついてしまい、詳しい集計表は省くが、概ね「不定期に（1回につき）5～10分程度」という結果が得られた。選択肢の中で、「f. 入学時，年度始め」「g. 辞書使用のための特別な期間を設ける」の回答数はそれぞれわずか4名(0.8%)、5名(1.0%)であり、「i. ほぼ毎時間」は66名(13.6%)にとどまった。辞書使用のための特別な時間を取ることなく、必要に応じて5～10分程度時間を取るのが全般的な傾向といえる。つまり、体系的な辞書指導は殆どされていないとも言えそうである。

表6 実施頻度を問うフォーマット

a. 1年間	b. 1学期または半期	c. 1ヶ月	に	() 時間	程度
d. 1週間	e. 単元毎	f. 入学時・年度始め			
g. 特定の期間を設けて(例:「辞書引き週間」など)					
h. 不定期に, 必要時に適宜		i. ほぼ毎日・毎時間			

3.3.4 「Q4) 具体的にどのような使わせ方をしていますか。」

授業で生徒にどのような辞書の使わせ方をしているかについて、質問紙に以下の a.~p.の選択肢を用意して複数回答で尋ねた。集計結果は表7のとおりである。なお、選択肢「n.」にある「辞書引き練習帳」とは、辞書を学校単位で購入した際に希望に応じて出版社から頒布される、辞書の使い方に慣れるためのワークブックのことを指す。また、「j.」には、教員自身の経験を踏まえた辞書活用法を教えることも含まれる。

表7 具体的使用方法 (複数回答)

	N=269	有効%
a. 新出語句の意味を参照	127	47.2
b. 用例・例文参照	165	61.3
c. 発音(記号や強勢等)を確認・参照	51	19.0
d. 分節の確認	6	2.2
e. 語法等の周辺情報を参照	104	38.7
f. 辞書引き競争	41	15.2
g. 複数辞書の引き比べ	5	1.9
h. 辞書をあえて使わず、類推力養成	8	3.0
i. 辞書使用の意義を説明	59	21.9
j. 引き方のコツを指導	50	18.6
k. 記号・約束事の説明	16	5.9
l. 「使い方」のページ参照	9	3.3
m. とにかく引かせる	28	10.4
n. 辞書引き練習帳を利用	8	3.0
o. 生徒の自由に任せる	37	13.8
p. その他	16	5.9

p. その他の具体的使用法

- ♯ 英作文で使用
- ・年1時間だけ辞書の使い方を指導。
- ・スピーチ作成時に学校の辞書を利用。
- ↑ 選択授業で物語を読ませたり、紙芝居を作らせる。
- ・自分が言いたいことを英語で言うためには自分で調べればいいと言ったことを教えたい。
- ・辞書の使い方用ワークシートを作成し、
- ↑ それに基づいて、4時間ほど指導している。
- ・自分の名前を英語にしてみる活動で和英を使う。
- ・大部分が間違っって意味をとらえていそうな
- ♯ 単語を引かせている。

辞書を使い始めたきっかけを尋ねた Q2) で、生徒が辞書の基本的な使い方を習得していないことがかなりの割合を占めていたが、それを受けて具体的にどのように辞書を使わせているのであろうか。「b. 用例参照」「a. 語義確認」「e. 語法等周辺情報参照」の順に数値が高いことから、必要時に単発で辞書を引かせていることがわかる。一方、「n. 辞書引き練習帳の利用」「l. 使い方のページ参照」などの基礎的な作業や、「g. 複数辞書の引き比べ」「h. 辞書無しでの類推力養成」等の時間を要する使わせ方は、それほどなされていないようである。

観点別分析では、a) 勤務校種別、d) 英語教員歴別、f) 授業での辞書使用暦別、の3つの観点の一部の回答項目で統計的有意差が認められた。まず、勤務校種別分析結果をまとめた表7-1によると、表7で高い数値を示した「語義の確認」「用例参照」「語法参照」は、中学よりも高校でよく実施されている($\chi^2=15.93, p<.01$; $\chi^2=8.02, p<.01$; $\chi^2=22.86, p<.01$)。一方、辞書を使ったことがない英語初学者が多い中学では「f. 辞書引き競争」がよく行われている($\chi^2=24.93, p<.01$)。また、中学では教員が辞書使用に関する指導や指示はせず、どう使うかは生徒自身に任せている割合も比較的高い($\chi^2=12.84, p<.01$)。小学校卒業記念で辞書をもらう生徒が多いことも考えると、中学入学と同時に体系的な辞書指導を始めるのに適した機会ではないだろうか。

年齢層別分析での有意差は「b. 用例参照」においてのみ認められ($\chi^2=9.25, p<.05$)、高年齢層ほどその実施率が高くなる傾向がみられた(表7-2)。表7と7-1で2番目と3番目に高

表7-1 具体的使用方法(a. 勤務校種別)

	全体 N=256	中学校 N=66	高等学校 N=190	χ^2 検定 df=1
a. 新出語句の意味を参照	46.9%	25.8%	54.2%	**
b. 用例・例文参照	60.2%	45.5%	65.3%	**
c. 発音(記号や強勢等)を確認・参照	19.5%	12.1%	22.1%	n.s
d. 分節の確認	2.0%	1.5%	2.1%	n.s
e. 語法等の周辺情報を参照	38.3%	13.6%	46.8%	**
f. 辞書引き競争	15.6%	34.8%	8.9%	**
g. 複数辞書の引き比べ	2.0%	1.5%	2.1%	n.s
h. 辞書をあえて使わず、類推力養成	2.7%	0.0%	3.7%	n.s
i. 辞書使用の意義を説明	22.7%	22.7%	22.6%	n.s
j. 引き方のコツを指導	18.8%	22.7%	17.4%	n.s
k. 記号・約束事の説明	6.3%	6.1%	6.3%	n.s
l. 「使い方」のページ参照	3.1%	1.5%	3.7%	n.s
m. とにかく引かせる	10.9%	12.1%	10.5%	n.s
n. 辞書引き練習帳を利用	3.1%	0.0%	4.2%	n.s
o. 生徒の自由に任せる	14.1%	27.3%	9.5%	**

**<.01

*p<.05

表7-2 具体的使用方法(c. 年齢層別)

	全体 N=266	20代 N=48	30代 N=99	40代 N=66	50代~ N=53	χ^2 検定 df=3
a. 新出語句の意味を参照	47.4%	52.1%	41.4%	40.9%	62.3%	n.s
b. 用例・例文参照	60.9%	50.0%	56.6%	62.1%	77.4%	*
c. 発音(記号や強勢等)を確認・参照	19.2%	20.8%	17.2%	16.7%	24.5%	n.s
d. 分節の確認	2.3%	6.3%	2.0%	1.5%	0.0%	n.s
e. 語法等の周辺情報を参照	38.7%	33.3%	40.4%	40.9%	37.7%	n.s
f. 辞書引き競争	15.0%	20.8%	17.2%	13.6%	7.5%	n.s
g. 複数辞書の引き比べ	1.9%	2.1%	1.0%	3.0%	1.9%	n.s
h. 辞書をあえて使わず、類推力養成	3.0%	4.2%	3.0%	3.0%	1.9%	n.s
i. 辞書使用の意義を説明	21.8%	18.8%	23.2%	22.7%	20.8%	n.s
j. 引き方のコツを指導	18.4%	14.6%	19.2%	18.2%	20.8%	n.s
k. 記号・約束事の説明	5.6%	8.3%	8.1%	3.0%	1.9%	n.s
l. 「使い方」のページ参照	3.4%	2.1%	6.1%	1.5%	1.9%	n.s
m. とにかく引かせる	10.5%	2.1%	14.1%	7.6%	15.1%	n.s
n. 辞書引き練習帳を利用	3.0%	2.1%	4.0%	3.0%	1.9%	n.s
o. 生徒の自由に任せる	13.9%	16.7%	16.2%	12.1%	9.4%	n.s

い数値を示した語義の確認や語法の参照では有意差は認められなかった。統計的有意差は認められなかったが、逆の傾向、つまり高年齢層ほど実施率が低下する傾向が、「f. 辞書引き競争」「h. 類推力養成」「k. 約束事の説明」「o. 生徒の自由」の4項目において見られた。つまり、表7の結果から導き出された、基礎的な作業や時間を要する使わせ方をすることに対しては、年齢層が高い教員ほど消極的になることを意味する。

このほか、英語教員歴別分析では「b.」($\chi^2=13.75$, $p<.01$)と「k.」($\chi^2=9.77$, $p<.05$)において、授業での辞書使用層別分析では「b.」($\chi^2=17.14$, $p<.01$)と「f.」($\chi^2=10.13$, $p<.05$)においてそれぞれ有意差が認められた。「b.」についてはともに年齢別分析と同様の傾向である。前者では、辞書引き競争をよく実施するのは英語教員歴5年未満の新人教員であり、30年以上の熟練教員は全くしないことが差にあらわれ、後者でも同様に30年以上辞書を授業で使わせている教員は誰も辞書引き競争をしないことが有意差にあらわれているようである。

3.3.5 「Q5) 授業での辞書使用の効果があらわれていると思いますか。具体的にどのような場面で効果が実感出来ますか。」

ここでは、普段の授業で辞書を使わせていることが生徒に及ぼす影響および効果の有無を選択式回答で、そして効果が認められる具体的な場面については自由記述式回答で尋ねた。その全体集計結果は表8のようになった。

表8 辞書使用の効果

辞書使用の効果	N=266	%
a. かなりある	10	3.8
b. ある程度ある	137	51.5
c. あまりない	43	16.2
d. 今思わないが期待できる	42	15.8
e. わからない	34	12.8

具体的効果	N=115	%	有効%
自主的に辞書を引くようになった	41	35.7	34.8
辞書引きが速くなった	20	17.4	17.4
予習してくるようになった	17	14.8	14.8
他の情報も注意するようになった	14	12.2	12.2
使いこなせるようになった	9	7.8	7.8
自分の表現が使えるようになった	8	7.0	7.0
英語力が付いた	7	6.1	6.1
英語への興味を示すようになった	4	3.5	3.5
辞書を持ってくるようになった	3	2.6	1.7
質問する生徒増加した	2	1.7	1.7
その他の少数意見	20	17.4	17.4

↓ ← ←
その他の少数意見

- ・「辞書を使えば分かることがたくさんある」「英語学習には辞書が必要」と感じる生徒が増えた。
- ・表現活動になると当然のように復習し、文例を参考にしてオリジナル文を使えるようになっている生徒が増えた。
- ・自由英作文の宿題を課すと未知の語句を使用している。 ・例文を訳に应用できたとき、生徒の顔に笑みがある。
- ・発音記号を学習することで、発音、アクセントの問題が解けるようになる副次的効果。
- ・ノートに補充例文がプラスされる。 ・生徒が自分で調べて「このような例文もある」と言うとき。
- ・授業外でも辞書を自主的に活用している。 ・疑問を持ったらずぐに辞書に手が伸びる生徒を見たとき。
- ・文脈の中で意味を選択出来るようになった。 ・楽しく辞書を使っている。

効果を実感している割合は、「a. かなりある」と「b. ある程度ある」を合わせると 55.3% で現時点ではわずか半数強であるが、「d. 今後に期待できる」を含めると 71.1%に達する。最も顕著にあらわれた効果は、教員が促さなくても生徒が自ら辞書を引くようになったことである。その他の少数意見の中には、英語教師冥利に尽きるコメントが多く見られる。辞書を使いこなせれば、予習・復習など普段の英語学習はもちろん、将来の自学・自習にも大いに役立つはずである。その基礎である辞書引き習慣が定着した、あるいはそれが期待できるという結果が得られ、授業で辞書を使わせることに充分意義はありそうである。

どの観点別分析においても有意差が認められた項目はなかったが、参考までに授業での辞書使用層別分析結果を表 8-1 に示す。ここで言えることは、辞書を使わせる授業を継続していれば、より効果が実感できるということである。但し本調査では、10年間継続してようやく半分近くの教員が効果を実感できるという結果が出ていることから、効果が実感できないからとすぐに辞書使用をやめてしまうのではなく、かなりねばり強く指導し続けることが肝心である。

表8-1 辞書使用の効果 (f. 授業での辞書使用層別)

	全体 N=233	～4年 N=68	5年～ N=36	10年～ N=65	20年～ N=31	30年～ N=33	χ^2 検定 df=16
a. かなりある	4.3%	5.9%	0.0%	1.5%	3.2%	12.1%	n.s.
b. ある程度ある	54.4%	42.6%	50.0%	56.9%	61.3%	72.7%	n.s.
c. あまりない	15.0%	16.2%	19.4%	15.4%	12.9%	9.1%	n.s.
d. 今思わないが期待できる	14.2%	22.1%	13.9%	13.8%	6.5%	6.1%	n.s.
e. わからない	12.0%	13.2%	16.7%	12.3%	16.1%	0.0%	n.s.

3.4 「授業で辞書を扱わない」教員の回答分析と結果

この分析では、3.2節の表1の「使わない」と「両方」の合計215名を対象とした。各質問事項の集計では、215名から無回答数を除外した残りを有効回答総数とした。2.4節で述べた2つの質問事項(Q1)と(Q2)の単純集計結果と各種観点別分析の集計結果を表で示し、それぞれの結果の解釈を試みる。

3.4.1 「Q1) 現在、辞書を使わせていないことに関して、次のa.～c.から該当する項目を1つ選んで下さい。」

まず、授業で生徒に辞書を使わせていない現状に至った背景について尋ねてみた。その結果は表9のとおりである。用意した3つの選択肢のそれぞれにほぼ均等に回答が分散し

表9 辞書を使わせていない背景

	N=214	%
a. かつて使用、現在未使用	63	29.4
b. 使わせたいが出来ていない	74	34.6
c. 使わせること自体を考えない	73	34.1
その他	4	1.9

ており、その経緯は様々であることがわかる。「a. 以前使わせていたことがあるが、現在は使わせていない」具体的理由には、「効果があらわれなかった」「以前は時間的余裕があった」などの事情が考えられる。「b. 使わせたいが、実現できていない」具体的理由については、Q2)と関わるため、次節で詳しく述べることにする。「c.」については、文字どおり辞書を使わせるという発想そのものが無い、あるいは重要と考えていないということであり、全体のおよそ3分の1を占めている。なお、「その他」には、辞書は予習や復習など家庭学習で活用すべきで授業中にわざわざ時間を取らなくてもよい、という旨のコメントが含まれる。これについても、Q2)に関わる内容であるため、ここで詳しくは触れない。

観点別分析結果のうち、ここでは勤務校種、年齢層、英語教員歴の3つについて述べる。まず勤務校種別分析では統計的に有意な差ではないが、かつて辞書を使わせた経験を有するのは高校教員に多く、使わせること自体を考えていないのは中学教員に多い傾向がうかがえる(表9-1)。年齢層別分析(表9-2)と英語教員歴別分析(表9-3)では有意差が認められた($\chi^2=13.68$, $p<.05$; $\chi^2=17.81$, $p<.05$)。ともに授業で辞書を使わせたいという思いがありながら実現できていないのは若手教員に特に多く、年齢を重ねるごとにその割合は減少していくが、熟練教員になると急増する。全くその逆の増減傾向が、かつて使わせていたが現在は使わせていない教員の回答に見られる。一方、辞書を使わせることを考えていない教員が、世代や職歴に関係なく約3分の1程度いることもわかる。

表9-1 辞書を使わせていない背景 (a. 勤務校種別)

	全体 N=211	中学校 N=165	高等学校 N=46	χ ² 検定 df=2
a. かつて使用、現在未使用	30.0%	27.2%	40.0%	n.s.
b. 使わせたいが出来ていない	35.3%	34.6%	37.8%	
c. 使わせること自体を考えない	34.8%	38.3%	22.2%	

表9-2 辞書を使わせていない背景 (c. 年齢層別)

	全体 n=208	20代 n=51	30代 n=81	40代 n=60	50代~ n=16	χ ² 検定 df=6
a. かつて使用、現在未使用	30.3%	15.7%	28.4%	43.3%	37.5%	*
b. 使わせたいが出来ていない	35.1%	51.0%	34.6%	23.3%	31.3%	
c. 使わせること自体を考えない	34.6%	33.3%	37.0%	33.3%	31.3%	

* p<.05

表9-3 辞書を使わせていない背景 (d. 英語教員歴別)

	全体 n=203	~4年 n=44	5年~ n=35	10年~ n=84	20年~ n=31	30年~ n=9	χ ² 検定 df=8
a. かつて使用、現在未使用	29.1%	13.6%	25.7%	33.3%	48.4%	11.1%	*
b. 使わせたいが出来ていない	35.5%	50.0%	42.9%	32.1%	12.9%	44.4%	
c. 使わせること自体を考えない	35.5%	36.4%	31.4%	34.5%	38.7%	44.4%	

3.4.2 「Q2) 授業で辞書を使わせていない理由を次の a. ~o. から選んで下さい。」

現在授業で辞書を使わせていない理由を複数回答で尋ねたところ、表10のようになった。

「a. 辞書を使わせるための時間が取れない」が約7割を占め、最大の理由となっている。次に多い理由が「c. 教科書巻末単語リストで済ませる」になっているが、辞書を使わせていない教員の大半は中学校教員が占めるためである。この事項には、教員が巻末単語リストを生徒に使わせる場合と、教員は使わせたくないが生徒が使ってしまう場合の両方が含まれる。表10の選択肢およびその他の少数意見の多くが、Q1)で触れた、辞書を使わせたいが実現できない理由に当てはまるといえるであろう。

表10 その理由 (複数回答)

	N=212	%
a. 時間がない	142	67.0
b. 生徒が辞書を持ってこない	23	10.8
c. 教科書巻末単語リストを利用	101	47.6
d. 市販の単語帳等を利用	3	1.4
e. 教科書ガイドを利用	8	3.8
f. 学力差・個人差のため指導難	28	13.2
g. かつて試みて効果が無かった	4	1.9
h. 指導方法がわからない	9	4.2
i. 指導不要・自然に覚えるはず	10	4.7
j. 面倒	3	1.4
k. 生徒は既習のはず	6	2.8
l. 生徒の辞書が不統一のため指導が難しい	14	6.6
m. 自作の語彙リストを利用	17	8.0
n. 授業中でなく家庭で使うべき	34	16.0
o. その他の少数意見	23	10.8

o. その他の少数意見

- ・多くの情報がある辞書を使いこなせず英語嫌いになる生徒を出したくない。
- ・単語、綴りはその場で英語で尋ねるように指導している。
- ・中学校段階では、辞書使用よりもまず「話せる英語力」、基礎的なコミュニケーション能力をつけたい。
- ・1クラス分の辞書が揃っていないので使えない。前任校では使っていた。揃っていれば多用したい。
- ・1年生時は全員が教科書を音読できること、わかる楽しい授業作りを目指したが、次第に学力差が広がり、辞書指導のきっかけを失ってしまった。
- ・普段は授業の内容から考えて使わない場合が多いので持てこさせていない。
- ・辞書を買うのに困難な家庭もあるので辞書を買うのを強制できない。
- ・必要なときは図書館の辞書を利用。
- ・辞書指導無くては辞書を使える力は育たない。選択授業等少人数では十分に指導する時間があるので、教材によっては使用するようにしている。
- ・選択授業くらいでしか活用する機会がない。
- ・中1の始めなので、今はまだ必要ないと考えるが、いずれは使わせるつもり。

勤務校種別分析結果を示した表 10-1 では有意差が 4 つの項目で認められた。中学では、「a 辞書使用のための時間が取れない」と「教科書巻末単語リストで済ませる」が主な理由であるのに対し、高校では「時間が取れない」に加えて、「生徒が辞書を授業に持って来ない」と「辞書は家庭学習用であり授業中にわざわざ時間を取る必要はない」が多くの割合を占めている。中学では便利な教科書巻末単語リストが一時的な辞書の役割を果たし、高校ではせっかくの教員の試みに生徒が応えない、という状況になってしまっていることがわかる。

表 10-1 具体的理由（複数回答）(a. 勤務校種別)

	全体 N=209	中学校 N=164	高等学校 N=45	χ^2 検定 df=1
a. 時間がない	67.0%	73.2%	44.4%	***
b. 生徒が辞書を持ってこない	11.0%	2.4%	42.2%	***
c. 教科書巻末単語リストを利用	48.3%	57.9%	13.3%	***
d. 市販の単語帳等を利用	1.4%	1.2%	2.2%	n.s.
e. 教科書ガイドを利用	3.8%	3.70%	4.40%	n.s.
f. 学力差・個人差のため指導難	12.4%	11.6%	15.6%	n.s.
g. かつて試みて効果が無かった	1.9%	1.2%	4.4%	n.s.
h. 指導方法がわからない	4.3%	3.0%	8.9%	n.s.
i. 指導不要・自然に覚えるはず	4.8%	5.5%	2.2%	n.s.
j. 面倒	1.0%	0.6%	2.2%	n.s.
k. 生徒は既習のはず	2.9%	1.8%	6.7%	n.s.
l. 生徒の辞書が不統一のため 指導が難しい	6.7%	4.9%	13.3%	n.s.
m. 自作の語彙リストを利用	7.7%	8.5%	4.4%	n.s.
n. 授業中でなく家庭で使うべき	15.3%	12.2%	26.7%	*

***p<.001, *p<.05

4. 考察

最後に、本調査の結果をまとめ、今後の辞書指導の在り方、課題について考察する。本調査では、第 1 節で触れた高知県の英語教員を対象にした井上・多良(2004)とほぼ同じ結果となったことに加え、次のような新たな結果も得られた。

まず、普段の授業で生徒に辞書を使わせる英語教員は全体の 6 割弱で (表 1)、その多くは高校教員であり (表 2a)、世代別では若手よりも熟練教員でその割合が多かった (表 2c)。使えて当たり前であるはずの辞書を生徒が使いこなせないことが、授業で使わせ始めた最大の理由であり (表 4)、特に高校教員でその傾向が強い (表 4-1)。周囲の環境に影響されて辞書を使わせ始めた割合は若手教員に多い (表 4-2)。実施状況 (表 5, 表 7, 7-1, 7-2) を見ると、中学では英作文をさせる時に英和辞書と和英辞書が同じ程度に使われている。その実施率は高学年になるほど高くなる。辞書引き競争をする以外は、特に使い方を指示せず生徒の自由に任せている教員が多い。一方、高校ではリーディングの際に英和辞書で例文、語義、語法を参照させる教員が多く、高学年になるとその実施率は下がる。中高いずれも、必要時に 5~10 分程度辞書を引かせているだけで、体系的な指導は行われていない。しかし、半数強の教員がその効果を実感しており (表 8)、熟練教員ほどその傾向が強くなる (表 8-1)。

授業で辞書を使わせていない背景は様々で (表 9)、中堅教員になるほどかつては辞書を使

わせていた割合が高く、逆に若手教員ほど使わせたいが実現できていない割合が高い（表 9-1, 9-2）。実施していない最大の理由は時間が取れないことにある。それに加え、中学では教科書巻末単語リストで済ませてしまうこと、高校では生徒が辞書を持参しないことが、それぞれ主な原因となっている（表 10, 10-1）。中学で辞書の必要性を感じないまま高校に進学するという一連の流れが出来上がってしまっているのかもしれない。また、どの世代にも辞書を使わせる考えが無い教員が約3分の1居ることが明らかになった。

今回の調査では50歳代以上、あるいは英語教員歴30年以上のいわゆる熟練層の回答には、他の世代とは異なる次のような特徴があった。まず、辞書を使わせる割合が群を抜いて高く（表 2c, d）、その効果を実感している割合は7割を越える（表 8-1）。一方、彼らの回答だけ、前述の表 9-2 で言及した「他の世代に見られた一連の回答傾向」に反していた。この原因を考えてみたところ、彼らは、必修単語数、英語授業時数ともに最も多かった昭和44年（中学）と昭和45年（高校）施行の学習指導要領下で学生時代を過ごしたことがあげられるが、それが要因である確証はなく、さらに研究が必要である。

各種観点別分析のうち、「e）出身大学での専攻」による有意差はどの質問項目においても認められなかったため、大学時代に英語を専攻していたか否かはその後の辞書指導の方針には影響を及ぼさないと考えようである。

今回の調査ではほとんど表面化しかつたが、実際には今まで辞書指導を受けたことが無く、指導の仕方がわからない教員がもっと存在するかもしれない。仮にそうであれば、その教員に習った生徒は辞書が使いこなせないだけでなく、将来教員になった場合には辞書指導が出来ない、という悪循環を招く危険性がある。そうならないためにも、今後は生徒への指導だけではなく、辞書指導がきちんとできる教員の養成を踏まえた指導や研修も必要になってくるであろう。また、現在では手軽な携帯型電子辞書が普及し、辞書事情は年を追うごとに変化し続けているため、その時代に応じた辞書指導が求められる。全国各地で開催される様々な教員研修やワークショップの中には、辞書指導に関するものも多く見られることから、英語教員が自主的にこれらに参加して研鑽に努めることも一案である。

現行の学習指導要領でも謳われているように、基礎・基本の定着、問題解決的な学習活動の重視、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」の育成などが求められている現代社会にあって、英語教育およびその学習に不可欠な辞書を有効に活用出来るように、中学校から体系的に指導していく必要がある。辞書の使い方は学校で教えられなくとも自然に身につけていくと考えられがちであるが、本当に辞書を使いこなせる能力を習得している人は果たしてどのくらいいるであろうか。授業で辞書の時間が取れないからこそ、自学自習の習慣を養うための辞書指導が必要なのではないだろうか。教師中心主義の授業や親切すぎる教材の見直し、辞書の使い方ワークブックの活用などをとおして、現在はほとんど実現できていない中高連携を念頭に置いた体系的な辞書指導の実施が、そろそろ検討され始めてもいいはずである。

授業における辞書使用の現状を把握するにあたり、今回は愛媛県の英語教員を対象とした

が、一般的な傾向を知るには他の都道府県でも同様の調査を定期的に継続していくことが必要である。今後は、本研究のような実態調査にとどまることなく、辞書使用の効果を実証的に検証していく必要がある。どのような学習者にどのような指導をどの程度行えばどの程度の英語力向上につながるのか、他の様々な学習法略とも比較しながら、最も有効な辞書の使い方とその指導方法を模索していくことが求められる。

参考文献

- 浅羽亮一 (1997). 「英語教育における英和辞典について—学習者の立場から」『明海大学外国語学部論集』9, 123-137.
- 井上祐子・多良静也 (2004). 「英和辞書指導に関する教員の意識調査と現状—高知県内中学校高校英語教員を対象にして」『高知大学教育学部研究報告』64, 69-80.
- 采女直史 (1983). 「高校入門期における辞書指導」『英語教育』32(9), 28-31.
- 清川英男 (1988). 「目で見える英語教育資料 第11回 辞書指導に関するアンケート」『現代英語教育』24(11), 44-45.
- 勝呂謙 (1988). 「自主学習の実態と辞書指導のあり方—単語検索能力は実力を反映するか—」『沼津工業高等専門学校研究報告』22, 75-86.
- 萩野敏 (1995). 「辞書指導としての学習英和辞典検討レポート」『大塚フォーラム』13, 84-89.
- 畠山豪 (2001). 「辞書指導の必要性和重要性—大学生の学習英和辞典の利用に関する調査から」『盛岡大学英語英米文学会会報』12, 60-68.
- 畠山利一 (1996). 「英和辞典の使われ方—大学生へのアンケート調査より—」『国際研究論叢』10(1/2), 79-92.
- 藤村榮雄 (2001). 「英語学習と辞書」『奈良産業大学紀要』17, 85-122.
- ベネッセ (2003). 「特集：新入生の学力変化の実態とその対策」『VIEW21』4, 2-11. ベネッセコーポレーション.
- ベネッセ教育研究所 (2002a). 『第3回学習基本調査報告書 中学生版』ベネッセコーポレーション.
- ベネッセ教育研究所 (2002b). 『第3回学習基本調査報告書 高校生版』ベネッセコーポレーション.
- 山岸勝榮 (1998). 『英語教育と辞書の思想と実践』こびあん書房.

資料 *実際に使用した10枚に及ぶアンケートから、本論に関わる部分のみを抜粋して掲載している。

① 授業
現在、

に
いますか
(はい . いいえ)
↓ ↓
このまま Aへ 4ページ Bへ

辞書 ごとをお 致

まずは
勤務校 (中学校 [中等部] . 高等学校 [高等部])
(教諭 . 助教諭 . 常勤講師 . 非常勤講師)
年齢 20代 . 30代 . 40代 . 50代 . それ) 性別 (男 . 女)
英語教師歴 今年度 () 担当学年* : (1 . 2 . 3) *複数選択可能
担当 クラスの **: 約 () : 他 () , ()
**人数
卒業大学 (専攻/学科 [海外]) 学部
・ 学部 a. 文学部 b. 教育学部 c. その他
・ 専攻/学科*** : a. 英米文学 b. 英語教育 c. 英語学 d. その他
***例 専攻名が

A. 普段、生徒

1. 授業 項目すべてに されていますか 担当
場合

- a. 毎時間持 している
- b. 必要 指示
- c. 特 生徒の
- d. あえて授業 持 ないよう することがある
- e. 辞書 持 来せずに、学校備品 図書室や
- f. その他 ()

2. 年 科目 授業 学年、 、 、 学

* 記入例 I Iと の . コースの . 英和辞書 必要
に 程度 が 薄 印刷されています 上書 なくても

- ・ 実施学年 a. 1 b. 2 c. 3 コース 英和 .)
- ・ a. 英語 I, II, 総合英語 b. リーディング c. 英作文/ライティング
- ・ d. オーラル/英会話 e. 総合的
- ・ f. その他 ()
- ・ a. 英和 b. 和英 c. 英英
- ・ 実施頻度:

a. 1 b. 1 c. 1 程度
d. 1 e. 単元毎 f. 入学時 始
g. 特定 : 「 などに
h. 不定期に、 時 i. ほぼ

3. 辞書 わせる授業 () ()

